

部活動改革、その先へ～地域で育むジュニアスポーツ～

「学校運動部活動」

(連載)
第16回

生徒を地域で支える仕組みとハブ人材の視点から 渋谷区スポーツ協会がめざすスタイル

ジュニアの充実したスポーツ環境をめざし——2024年度から2年目に入れた「運動部活動の改革推進期間」。今号は、部活動への指導者派遣と新たなクラブの設立というダブルの体制でジュニア・ユーススポーツを支える新しい形を構築する渋谷区スポーツ協会（東京）の取り組みをレポートする。

まず専任団体が設立され
そして、区スポーツ協会へ

全国で本格的な部活動改革が始まる前の2021年、東京渋谷区では部活動改革推進を目的に、渋谷区、同教育委員会、同区立中学校が連携するための外郭団体「渋谷ユナイテッド」を設立した。当時の状況を渋谷区スポーツ協会専任理事の田丸尚稔氏が振り返る。

「部活動の外部移行の動きは今年始まったわけではなく、10年以上前からあり、成功事例を見ると、学校協力者がいる、あるいは関係者をつなぐハブとなる人材がカギになるケースが多く報告されています。そうなるべく、いくら外郭団体があっても学校の協力なくして改革は進まず、ユナイテッド設立後からの3年間で、渋谷区スポーツ振興を所掌する部局、教育委員会とともに毎週のように話し合っていました」

その段階ではユナイテッドとは別に70年以上の歴史を持つ渋谷区体育協会があり、前者はジュニアユーススポーツ振興、後者は区民大会開催など区のスポーツ振興を担っていたが、それぞれの強みを整理し、この4月に設立された渋谷区スポーツ協会に両団

体が合併し、新たなスタートを切った。

ジュニアユース活動に話を絞ると、ユナイテッド時代も含め大きく二つの取り組みが始まっている。一つは、まさに学校部活動の地域連携移行、もう一つはユナイテッドクラブの開始だ。まず前者について、田丸氏が続ける。

「区内には8つの公立中学校があり、また、改革推進には各校の理解、また、われわれの体制に鑑み、まず2校をモデル校として実施。改革は時に、軋轢や誰かしらに負担が生じますが、何より、中心にいる子どもたちが犠牲にならないよう校長はじめ教員の皆さんとコミュニケーションを重ね、昨年度、スタートしました」

部活動への指導者派遣と 地域クラブで活動支援

部活動改革では指導者不足が課題となるケースが多いが……。「長らく指導されてきた外部指導者を第1優先に足りなければ新たな人材を探す方向にしています」

教員の負担軽減、従来の外部指導者の心意気もくみ取った形は、教員からは「本来の仕事である教科準備の時間が増えた」「土日の引率減で家族と過ごす時間

が多くなった」などの声上がり、一方、子どもの満足度も高いという。専門の指導者の練習メニューが受けられる一方、友達と楽しくやるスタイルも変わっていないなどがその理由。そしてこのケースが順調に進めば来年度さらに2校、ゆくゆくは全8校で改革を進めていく予定だ。

二方の取り組み、ユナイテッドクラブはこんな理由から誕生した。「部活動改革にあたって生徒の声を聞くと共に多様なニーズがあり、既存の部活動だけでは対応し切れない。そこで、学校ではできなかった新しい地域活動として同クラブを始めました」

ボッチャ、ダンス、フライング、料理やeスポーツ、将棋など活動内容は多岐にわたる。「幸い、支援を申し出てくれる地元企業、団体、学校などが複数あり、それぞれの施設などを利用し、希望する生徒は、水曜または土曜日に活動しています」

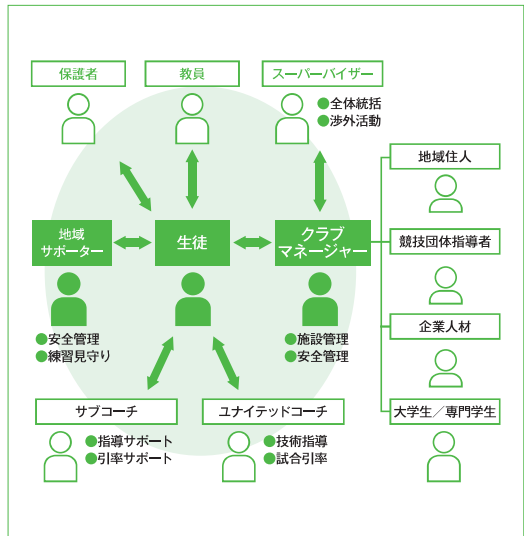
ちなみに、同クラブの参加者は会費と保険料を負担し、活動運営費などに充てられている。指導者も各団体のスタッフや公認インストラクター（※）らが並ぶが、これも競技団体や施設が充実した都会の渋谷ならではの特徴の一つといえる。

ど真ん中に生徒を置き、 地域全体で価値を共有

「意識調査からは、生徒は有名指導者による指導を受けるより、友達と楽しく活動したいという意見が多くあることから、地域住人のサポートで十分に生徒たちのニーズを満たすことができると考えています」

渋谷という土地柄もあり、各地域の特性を生かすことが持続可能性につながると考えます。例えば、海の近い渋谷でサーフィンは無理ですし、トレッキングなども同様。クラブはもっとフレキシブル

■渋谷区スポーツ協会が考える生徒センタード——地域全体による活動サポート



でいい。昔ながらの文化漂う地域で生き字引のような人がいれば、そうした人から学ぶ文化探究クラブのようなものがあってもいいと思う」

こうした発想の根底にあるのは、プレイヤーズセンタード（※）の考え方を参考にした構図である（右図表参照）。生徒を中心に、保護者、教員、地域サポーター、さらには地域住人や企業などが体となり、生徒だけではなく、それぞ

れが自らも活動参加の意味を見いだす。

「お金をかけずに地域のリソース

カギを握るのは コーディネーター

「部活動改革では技術指導を担う人材を探すことに目が行きがちですが、技術指導者とともに、人材が循環するシステムを管理、促進できるコーディネーターのような人材がカギを握ると思います」

モデル校で取り入れられる実際の姿はこうだ。現場でマネジ

メント業務に携わる同協会クラブ事業部マネージャーの寺西美氏が詳細を説明する。

「既存の部活動に1人以上のユナイテッドコーチと呼ばれる指導者を配置（サブコーチがいる場合もあり）。一般的には技術指導が中心ですが、ユナイテッドコーチは大会エントリーや生徒名簿作成など顧問業も行います。こうした各部のコーチをまとめる人材としてクラブマネージャーや人に置き、コーチの動意管理や時には教員や保護者のやり取りを多面的にフォロー、また施設や安全管理に務める。

さらに、複数モデル校を並列的にサポートするスーパーバイザーが全体統括に入ります」

ユナイテッドコーチは、「コーチ育成のための『モデル・コア・カリキュラム』（JSPC）を参考に



取材日はあいにくの雨天だったが、校内でも有効活用し、それぞれの活動を楽しむ

※2=https://www.japan-sports.or.jp/Portals/0/data0/coach/event/pdf/SJ56PlayersCentered.pdf参照

渋谷の未来も胸に部活動改革を語る。左から田丸尚稔、寺西美、久保田淳の各氏

写真/山岡邦彦